

明治大学国際総合研究所「第33回 EU 研究会」議事録

- 開催日：2017年9月28日
- 会場：明治大学駿河台校舎
- 基調報告：森井 裕一（東京大学 大学院総合文化研究科 教授）
- テーマ：「ドイツ選挙（9月24日）後のドイツ並びに EU 情勢の展望」

基調報告：「ドイツ選挙（9月24日）後のドイツ並びに EU 情勢の展望」

1. 「ドイツの選択肢」の躍進が意味するもの

選挙前、極右ポピュリストである「ドイツの選択肢（以下 AfD）」の伸長について不安はないのかと訊かれたとき、私はそれほど心配していなかった。というのも、AfD がある程度の議席を確保しても、法案や審議の内容が左右されることはないからだ。それは今まで左派党を排除しながら政策運営をしてきた経験を見ても言える。そのため AfD の登場は、ドイツ政治に決定的な影響は及ぼさないから大丈夫だろうと考えていた。

しかし今回の選挙結果を見て、それほど楽観していいものではないと思うようになった。確かに政策的に AfD が影響を及ぼすことはないだろうが、懸念すべきは、ドイツ政治において、ポピュリストが許容される土壌ができ始めてしまったのではないかという点である。というのも、今回の選挙戦では、今まで決して許されなかったネオナチ的、国粋主義的な言動が繰り返し出てきた。そのような言動はかつてのドイツ政治であれば、徹底的に排除されてきた。それが今回は、メディアが否定的に取り上げて叩いても、全くめげず、逆に得票を伸ばしてしまった。旧東ドイツだけで見ると、4人に1人、地域によっては3人に1人が AfD を支持している。これはかなり深刻な事態なのではないだろうか。

2. 選挙結果の評価

今回の選挙結果は、3つの大きな特徴がある。

- 1) キリスト教民主同盟・社会同盟（以下 CDU/CSU）と社会民主党（以下 SPD）という2つの主要政党が大きく票を減らした。
- 2) 極右ポピュリスト政党「ドイツの選択肢（AfD）」が躍進した。
- 3) 東西ドイツの差が非常に大きく出た。

2-1. AfD に流れた票

前回の選挙から比べると、今回は投票率が5%ほど上がっている。その上がった分のかなりの割合が AfD に投票している。また前回の選挙では CDU/CSU に投票したうちの100万人が今回 AfD に移行してしまった。更に興味深いことに、政治スペクトラム的に一番左にある左派党に前回投票した人の11%も、真逆の最も右側にある AfD に今回投票している。つまり、AfD への投票は、政治イデオロギーに共鳴しているのではなく、他に対する不満を反映していると解釈される。

2-2. 国民政党 2 つの凋落

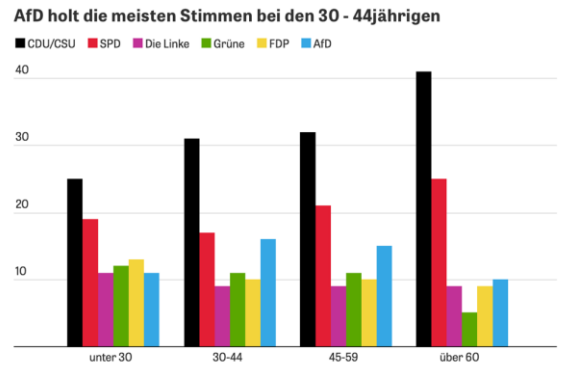
CDU/CSU の約33%という得票率は、1949年の戦後最初の選挙に次いで低い。SPDに至っては約20%と、1949年の選挙よりも低く、戦後最低の得票率となってしまった。

CSU はバイエルン州のみに存在する CDU の姉妹政党だが、これまでずっと単独で州政権を担える強さを持っていた。それが今回、バイエルン州だけの得票率で見ると、前回の選挙から比べて10.5%減少している。2018年秋にバイエルン州では選挙があるため、CSU はかなり難しい状況に置かれてしまった。メルケル政権もそこに配慮しなければならず、常に CDU よりやや右寄りの政策をとる CSU のために、今後移民政策等では厳しい状況が生まれることが想定される。

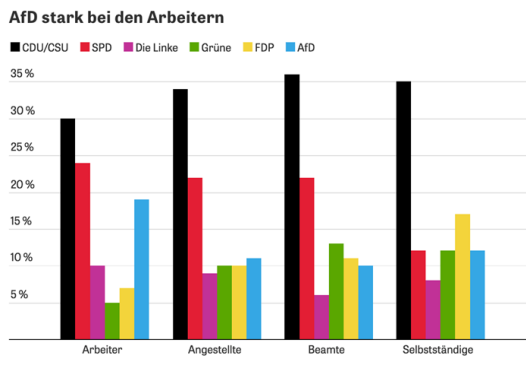
3. AfD の躍進とその背景

3-1. AfD の支持層

右は年齢別の支持政党のグラフである。AfD は30代から50代に支持されている。CDU/CSU や SPD といった既存政党は高齢者に比較的 support されている。18歳から20代の若年層はあまり



Quelle: Forschungsgruppe Wahlen für das ZDF



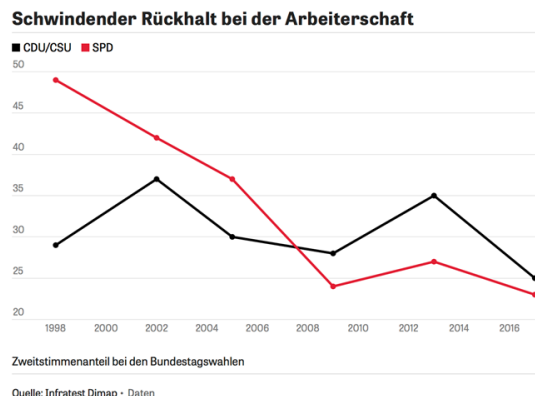
Quelle: Forschungsgruppe Wahlen für das ZDF

極右に向かわず、FDP や緑の党に支持が比較的向かう傾向がある。

左図は、左からブルーカラー、ホワイトカラー、公務員、自営業の支持政党を示している。ここから、ブルーカラーの人達が非常に強く AfD を支持している傾向が見える。

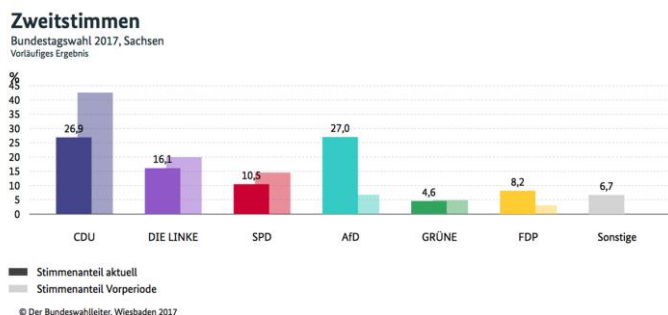
右は、ブルーカラーの人達が、大連立政権を構成していた CDU/CSU と SPD をどれくらい支持してきたかを示したグラフである。

これを見ると、労働者の党と言われ、労働組合が支持してきた SPD は、1990年代、つまりシュレーダー政権の時代から一気に支持を落としていることがわかる。シュレーダー改革と呼ばれる労働市場改革、社会保障改革が進むにつれて支持率が低下し、2005年にシュレーダーが選挙に負けた後もずっと支持率を落とし続けている。2008年には CDU/CSU と逆転しており、一般に労働者のイメージの強い SPD のほうが、むしろ労働者から支持されていないことが見て取れる。SPD から離れていった人達は左派党に流れたと考えられる。



3-2. 実体的な社会問題に対する不満を反映しているわけではない

下はザクセン州の選挙結果を示している。旧東ドイツ地域では、第一党は辛うじて CDU がとり、次に AfD、そして左派党、4 番目に SPD がくるという傾向がある。その中でザクセン州は特殊で、AfD が第一党になっている。



しかしザクセン州の経済状況は決して悪くない。産業誘致にも成功しており、2016年の経済成長率はドイツの中で最も高い。

また移民が増えていると言っても、ザクセン州の外国人比率は4%弱であり、全国平均の

11%をはるかに下回る。フランクフルトやベルリンでは20%に迫る地域もあるが、それらの地域では AfD は問題になっていない。

つまり、雇用問題や経済格差、移民問題などの何か実体的な問題があり、それに対する不満を反映しているわけではない。

3-3. 旧東ドイツ地域の政治・文化的な「疎外感」

AfD への支持に向かう人々の背景には、経済格差等ではなく、むしろ「自分達は文化的・政治的に疎外されている」という認識がある。¹

¹ Holger Lengfeld. 2017. "Die „Alternative für Deutschland“: eine Partei für Modernisierungsverlierer?", *KZfSS Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 69(2), pp209-232

「大連立政権は自分達を代表しておらず、西ドイツ的な政治文化から自分達は疎外されている。特に EU については完全に専門家が独占してしまっていて、自分達には何も発言権がない」。このような認識を、AfD を支持する人々は持っている。

AfD は皆「ドイツを取り戻す」と主張している。自分達こそ「本当のドイツ人」を代表しているとし、EU 官僚や、西ドイツ的な政治エリートから政治を取り戻すという、反エリート主義、反多元主義を謳い、まさにポピュリズムの典型と言えるのではないか。

4. メルケル政権の行方

可能性としては、SPD と大連立を組むか、自由民主党（以下 FDP）と緑の党とのジャマイカ連立²かという 2 つが挙げられる。ただ CDU/CSU と SPD という国民政党 2 つが小さくなってしまったので、大連立でも 399 議席、ジャマイカ連立でも 393 議席しかない。

SPD は、20%しか得票できず、東ドイツでは第 4 位の地位しかないという結果を見て、このままでは党が溶けてなくなってしまうことを懸念し、早々に大連立をやめることを表明した。

ジャマイカ連立は計算上は可能だが、政党間の政策距離が非常に遠いため、合意は容易ではない。ジャマイカ連立は州レベルでは 2 度経験があるが、国政レベルではない。ローカルな現場の問題では妥協できても、国政は外交安全保障や金融政策など、はるかに権限が幅広い。ここで同じことができるという、相当に難しいだろう。特に FDP は、2012 年の選挙で大敗し議席を全て失った後、悉く人が入れ替わっているため、未知数なところが多い。大連立と比べるとジャマイカ連立は不安定な要素が多いと言える。

報告後、ジャマイカ連立は交渉が決裂し、大連立再発足の交渉が開始された。

5. ヨーロッパの協調

選挙後の対 EU 政策が変わるのかどうかというと、どの連立の組み方にしても、AfD と左派党を排除して政権は組まれるので、原則は変わらない。大連立の場合にはこれまでと同じなので、基本的に大きな差は見られない、一番安定的な状況と言える。

² CDU/CSU、FDP、緑の党の各党のシンボルカラーが黒、黄、緑とジャマイカの国旗と同じ色であることから、この 3 党の連立は「ジャマイカ連立」と呼ばれる。

また緑の党は、かつてのラディカルな路線を転換し、対外政策という視点から見ると、安定的な、ドイツのヨーロッパ統合政策の基本線に忠実な路線をとるようになってきている。EUの連帯や南欧諸国の支援についても積極的な姿勢を見せており、他のヨーロッパの国々から見ても、緑の党の声が大きくなるというのは好ましいだろう。

ドイツの総選挙後、マクロン仏大統領は演説の中で、独仏協調強化など、ヨーロッパ統合のビジョンを提示した。これにどこまでドイツが応じることができるのかを考えると、議会や連邦憲法裁判所の制約が厳しいだけでなく、AfDが相当程度支持されるという国内の声にも配慮していかなければならないため、ドイツがEUのリーダーという形で大きな貢献をしていくというのは、今まで以上に困難になってくることが予想される。

質疑応答およびディスカッション

- 今回の選挙戦では、SPDの候補がシュルツに決まったときに、急速に支持率が上昇したときがあったが、すぐにしぼんでしまったのは何故か？

確かに今年の1月末から3月の初旬までシュルツ人気で、緑の党やFDP、AfDの支持率も下がり、このままドイツは二大政党に収斂して安定するだろうと思われていた。

しかしシュルツの元欧州議会議長という肩書を背負ってドイツの国民に向かってヨーロッパ問題を語る場所に、AfDを支持するような人々は、ますます疎外感を感じていったのではないか。

またSPDは3月後半から4月の州議会選挙で悉く負けた。地方選挙には地方選挙の論理があるので、本来は連邦の首相の立候補者に地方選挙での敗北の責任はないが、新しい政策やイニシアティブを出せないのだというイメージがついてしまい、そこにAfDのネガティブキャンペーンが効いてしまったのだろう。

- AfDの支持率上昇は、経済等の実体的な問題ではなく文化的な問題であるというお話であったが、その文化的な問題とはどんなものなのか？

AfDがネオナチ的な発言をするたびに、彼ら彼女らのダメさ加減を見せるために、メディアは面白おかしく取り上げていた。しかしAfDを支持する人達は発言や議論の中身はあまり見ておらず、却って露出したことで支持が拡大してしまった。

またAfDが党内で割れているということも昨年の夏頃からずっと言われている。ネオ

ナチを排除し、超保守ではあるが公安からチェックされない程度にはまともなところに引き戻し、ウイングを広げようとしたペトリーの路線がうまくいかず、もっと極右のほうに引きずられているのが今の状況。経済の実態が AfD を弱めないのと同じで、内紛が評価に結びつかない。

これは考えてみると、ハンガリーのオルバーン政権やポーランドの「法と正義」政権と同じパターン。東西ドイツが再統一され、西ドイツ的な価値が東ドイツにも植え付けられ、政治文化も寛容になって 27 年経ったが、実はスターリニズムの残滓のような、権威主義や反多元主義に引っ張られる心情が東ドイツにはあり、それが AfD に向かっているのではないかという議論も出始めている。最近では「脱再統一化 (Entwiedervereinigung)」という言葉まで見るようになった。

■ 東西の価値観の違いは実際にはかなり残っている？

そう思う。最もそれを象徴的に表しているのが、緑の党の支持率だろう。緑の党は環境、平和、寛容、連帯と、西ドイツを象徴する価値観を持っている。この緑の党が、東ドイツ地域ではほとんど、5%も得票できていない。つまりそれらの価値観は東ドイツには浸透しておらず、地元の保守層が支持する CDU か、旧共産党の流れを引き社会不満を反映する左派党か、或いは極右の AfD かの選択になっているということを考えると、これは明らかに、西ドイツ地域の政治文化とは違うものが東にはあると見たほうが良いのではないか。

■ 東西の価値観の違いには、歴史教育やナチの評価の違いも関係しているか？

しているだろう。東ドイツの認識では、ナチは西ドイツが継承しており、社会主義である自分たち東ドイツは反ファシズム、反ナチズムの無垢な存在であると教育してきた。歴史が一旦切れていて、完全に別物であるという認識。そのため罪悪感も、歴史に対する反省もない。

ただ気持ちの悪いのは、AfD がバイエルンで 13%も得票したことからわかるように、そのような心情が東ドイツだけでなく西ドイツにも浸透してきていることだ。

■ 反移民を主張したことで AfD の支持が高まったという報道をよく見るが、そうとも言い切れない？

反移民の主張が効いているのは事実だが、政策を信頼されているわけではない。選挙前にテレビ局の調査で、「どの政党がどの政策能力が強いと思うか？」というアンケートがあった。CDUは経済、緑の党は環境等と一般的なイメージ通りの結果が出る中、AfDは移民政策を見ても信頼度が高くない。つまり AfDへの投票理由は政策に対する信頼ではなく、「他が嫌だから AfDに入れる」という抗議票なのである。そのため AfDに投票すれば問題が解決するとは支持者にも思われていないのではないか。

■ バイエルン州で AfD が躍進したのは難民問題が響いたケースだと考えていたのだが、そうではない？

バイエルン州と難民問題は、評価がまだわからない。ただ AfD の政策に近い、もっと右寄りの政策を出せば成功するのかもしれない、そうとも言えない。CSU は CDU よりも右寄りで、もっと厳しい難民政策をとるよう主張していたにも拘らず、大きく票を減らしている。AfD に近い政策を出せばその支持を吸収できるというわけではないようだ。これはもう少し色々な調査を見て慎重に考察する必要があるだろう。

■ 中道左派政党の凋落がヨーロッパ全体で見られる。その中でイギリスの労働党は左派色の強い党首を得ることによって党勢を回復しているが、SPD もそのように左寄りに行くのか？

SPD の新しく今回構成される議会の院内会派の会長は現閣僚のアンドレア・ナーレスだが、彼女は党内左派なので、おっしゃるように左派色を強めようとしているのかもしれない。だがドイツの場合はイギリスと違い、SPD の左派が抜けて作った左派党があるので、あまり左に寄るとそちらに吸収されかねないという苦悩がある。

■ 連立交渉で一番大きな争点になるのはどのあたりか？

確かに難民問題はシンボリックだが、それよりも産業政策や、環境政策と産業政策が接するところのほうが、現場の交渉としては難しいのではないか。